大豆「里のほほえみ」展示ほ結果概要

展示ほの成績

試験地名	品種名	播種日	出芽期	開花期	成熟期	生育中の障害						主茎長	主茎節数	分枝数	莢数	最下着莢節位高	a当り子実重	標準対比	百粒重	障害粒					品質	
						倒伏	蔓化	ウイルス	立枯	青立	わい化									紫斑	褐斑	裂皮	しわ	虫害	大豆調査基準	等級
		(月日)	(月日)	(月日)	(月日)							(cm)	数	(本/株)	(莢/株)	(cm)	(kg)	(%)	(g)							
吉見	里のほほえみ	6.30	7.5	8.21	10.26	0	0	0	0	1	1	40	12.3	7.6	28.0	−	26.3	−	36.5	0	0	0	0	0	3	3
本庄		7.14	7.21	8.23	11.4	1	1	0	0	0	0	56	12.5	3.6	28.8	18.0	27.7	−	43.0	0	1	1	2	0	4	2
加須		7.10	7.14	8.17	10.30	0	0	0	0	0	0	46	12.3	4.2	35.5	11.0	32.9	92	46.4	1	1	1	1	2	5	3
久喜		6.29	7.5	8.13	10.28	0	0	0	0	0	0	49	11.0	4.0	64.0	9.0	21.2	−	39.3	0	0	1	1	2	5	−
(平均)		7.5	7.11	8.18	10.29	0.3	0.3	0.0	0.0	0.3	0.3	48	12.0	4.9	39.1	−	27.0	−	41.3	0.3	0.5	0.8	1.0	1.0	4.3	−
加須	タチナガハ	7.10	7.14	8.17	10.22	0	0	0	0	0	0	47	12.3	3.3	35.8	9.8	35.8	100	38.1	1	1	1	2	2	5	−

展示ほでの評価

【吉見】
・「タチナガハ」は茎の枯れ上がりが遅く、収穫作業を遅らせた結果、裂莢が多発し収量が減少したが、「里のほほえみ」は収穫作業まで裂莢が少なく、収量につながった。
・今年は「里のほほえみ」でも青立ちは発生したが、多いところで発生株率約4%であった。
・開花時期は「タチナガハ」とほぼ同じ、収穫時期は「タチナガハ」よりやや遅いが、品種の切り替わりでは大きな 問題はないと考える。
・地域では豆腐、しょうゆ等へ出荷する場合が多く、「エンレイ」に代る高タンパク質含有量の大豆品種が求められており、品質面でも期待されている。

【本庄】
・「里のほほえみ」の簡易作溝播種機による狭畦密植無培土栽培は7月中旬播種でも収量が確保され、品質も良好であった。
・収穫時まで裂莢がほとんど見られず、脱粒は非常に少ないため、収穫ロスが少なかった。
・開花期間が長いため、開花の遅かった莢の子実肥大が懸念され、粒径のばらつきや小粒化が心配されたが、大粒割合が97%と高く、収量も確保できる品種と考えられる。
・晩播栽培では「里のほほえみ」は「タチナガハ」と比べて落葉が遅く、茎の水分が抜けるのも遅かったが、難脱粒性のため適期収穫が可能であった。

【加須】
・タチナガハと比較して主茎長、主茎節数は同程度だが、主茎径は太い。分枝数が多いため総節数も多いが、着莢数は同程度であった。
・一莢内粒数は1粒、2粒が多く、3粒以上は少ないため収量は92%とやや低かったが、百粒重は122%と大きく、品質的は良好であった。
・収穫まで、降雨によりたびたび乾湿が繰り返されたが、里のほほえみは裂皮粒やしわ粒の発生が少なく、裂莢もほとんど見られなかった。
・収穫ロスが少ないため実質的な収量は多く、成熟期を過ぎても品質が低下しにくかった。

【久喜】
・紫斑病の発生が懸念されたが、分解調査では1粒もなかった。
・10月28日には木枯らし1号が吹き、裂莢、脱粒しやすいタチナガハは収量が100kg前後に減収するとみているが、里のほほえみは裂莢、脱粒がほとんどなく212kgが確保された。
・「里のほほえみ」はほとんど裂莢せず、加工適正の面でも期待できるということなので、生産者は早く品種を代えたいと切望している。